

序にかえて

小 泉 吉 永

「教育」という言葉が庶民に浸透したのはいつ頃であろうか。

『日本国語大事典』（小学館）の「教育」項には「知識を与え、個人の能力を伸ばすためのいとなみ。現代では、一定期間、計画的、組織的に行なう学校教育をさす場合が多い」とあり、江村北海作、天明三年（一七八三）刊『授業編』四巻の「孔子ハ」其ノ他從遊ノ弟子ヲ教育マシ／＼テ：」の用例を掲げる。

しかし、既に享保一九年（一七三四）序『民家童蒙解』四巻「教育」章で、常盤潭北は庶民家庭の育児の要諦を縷々述べている。本書は北関東一円を遊歴した講話録で、彼が講話の中で「教育」という言葉に触れたか否かは不明だが、少なくとも本書によつて、家庭教育としての「教育」が庶民に広がったことは間違いない。また、さらに古く、江戸の医者・千村拙庵は元禄元年（一六八八）序『小児養生録』で「三つ子の意は百になるまでとをるといひ伝れば、いよく教育をつゝしむべし」と幼児教育の重要性を説いており、近世の育児書では家庭教育としての「教育」の用例が古い。

このたび、『近世育児書集成』は第一弾（第一～一〇巻）に引き続き、『民家童蒙解』など五〇点を第一～一八巻に収録し刊行する運びとなった。育児に関する言説は、育児書以外の様々な文献に登場するため、探せば無数に出てくるが、基本文献はほぼ網羅できたと考えている。

ちなみに、本集成所収の育児書一〇四点（重複や不明を除く著者九一人）を改めて俯瞰すると、一八世紀以後の育児書の急増が著書の多様化と無縁でないことに気付く。著者九一人の職分は、①漢学者二二・〇％、②医者九・三％、③書家・手習師匠七・一％、④往来物作者六・六％、⑤心学者六・〇％、⑥僧侶四・九％、⑦幕臣（郡代・代官）四・九％、⑧経世家三・八％、⑨俳人・歌人・漢詩人三・三％、⑩商家三・三％の順に多く、以下、戯作者、神道家・国学者、書肆、作家（仮名草子・読本等）、藩士、故実家、庶民篤志家、将軍・大名、道学者・教育家、武家女性、絵師、農家、農政家と続く。このうち、医者の育児書は江戸期を通じて一定割合で推移したが、漢学者の育児書は一八世紀以後激減し、変わって庶民の育児書が台頭した。

いずれにせよ、近世の育児書については、著者の職分や性別、想定された読者対象と、育児書に説かれた児童観や教育論との関係など、まだまだ検討の余地が多く、女訓書等の育児論にもさらに目を向ける必要がある。今後、これらの研究に本集成が活用され、日本の教育文化が見直されることを願っている。

（法政大学講師・往来物研究家）